

機関番号：20101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20592588

研究課題名(和文) 家庭内の受動喫煙減少に向けた病児ケアガイドラインの開発

研究課題名(英文) Development of a care guideline to support the reduction in passive smoking by sick children in the home environment

研究代表者

今野 美紀 (KONNO MIKI)

札幌医科大学・保健医療学部・准教授

研究者番号：00264531

研究成果の概要(和文)：本研究目的は(1)小児看護実践者が病児の親へ禁煙・分煙をすすめる上での課題を明らかにする、(2)病児の親へ禁煙・分煙をすすめるケアガイドラインを開発する、以上2点を明らかにすることである。(1)質問紙調査2705部の解析から、看護師の喫煙知識は不十分で、8割程度が「病児家族に禁煙・分煙が必要性」と認識しても、支援実施率は1～2割程度であった。(2)1小児病棟と禁煙アクションプランを作成・評価した。組織理念とプランが結びつき管理職から支持があること、それが実践者の心理的抵抗を和らげる一助になると考えられた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this study was to (1) identify issues with pediatric care practitioners in giving anti-smoking support to the smoking family members of sick children and (2) develop a care guideline to encourage them to stop smoking altogether or in front of children. (1) Statistical analysis of 2705 returned questionnaire forms revealed that nurses generally had insufficient knowledge about smoking. Moreover only 10-20% of them had an experience of discouraging the family members of sick children from smoking even though 80% did recognize the importance of keeping sick children away from smoking. (2) The authors' team worked with a pediatric ward of a particular hospital to produce an anti-smoking action plan and evaluated its effects on the attitude of nurses. The authors suggest that an action plan consistent with the hospital's philosophy and management support to it would be essential in helping the care practitioners overcome their psychological reluctance in giving anti-smoking support to the families.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2009年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2010年度	1,100,000	330,000	1,430,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：看護学・生涯発達看護学

キーワード：小児、家族、看護、禁煙

## 1. 研究開始当初の背景

受動喫煙により小児の気管支喘息、中耳炎、乳幼児突然死症候群をはじめ、健康や成長発達に悪影響が及ぼされることが明らかになってきており、周産期～小児期のタバコ対策が行われている。この問題に憂慮する小児科医らは子どもの入院や外来・乳児健診の機会を捉えて両親へ禁煙指導を行い、その効果を報告している。禁煙支援活動はチームアプローチで臨むと効果があり、看護師の取組みに期待がある。しかし、日本看護協会 2006 年度実態調査報告では、看護師の喫煙率は 19.9% (男性 54.2%、女性 18.5%) で 5 年前の同調査に比べて 5.8% 低下したが、一般成人男女に比べて高率である。これは健康支援者としてロールモデルを果たす上で課題となっている。また、本邦においては看護師によって実践されている病児の家族への禁煙支援の実態は明らかではない。

## 2. 研究の目的

- (1) 小児看護実践者が病児の親へ禁煙・分煙をすすめる上での課題を明らかにする。
- (2) 病児の親へ禁煙・分煙をすすめるケアガイドラインを開発する。

この研究目的のもとに調査を行い、データに基づいて看護ケアガイドラインを開発し、有効性を検討する。

## 3. 研究の方法

研究目的(1)に関しては、質問紙による横断調査を行った。《対象》は(a)北海道内小児科診療所に勤務する看護師と(b)全国の小児病棟(小児科病棟、小児外科病棟、小児混合病棟を含む)もしくは小児科・小児外科外来に勤務する看護師であった。《データ収集方法》(a)道内主要都市(人口 10 万人規模)にある小児科診療所を

電話帳ですべて調べリスト化した。施設長宛に各施設 3 部の調査用紙を送り、郵送回収を行った。

(b) 病院要覧(2001 - 2002 年版)を参考に小児科・小児外科のある病院をリスト化し、ホームページで存続を確認した後に、全国 1983 カ所の病院を抽出した。施設長あてに調査目的、方法を記した文書と調査用紙を郵送して調査協力を求めた。協力可能な場合は自院の実状に応じた部数を設定してもらい FAX での情報提供を依頼した。その後、看護師あてに調査用紙の配布を依頼し、回答後は個別郵送回収を行った。《質問紙の概要》対象の属性(年齢、性別、勤務年数、喫煙経験、禁煙への関心)、喫煙知識、喫煙に対する態度、病児の家族への禁煙・分煙支援の実際、で構成した。①喫煙知識 「タバコを吸うことで病気にかかりやすくなるか」を問い、能動喫煙に関する問い(8 項目)と受動喫煙に関する問い(8 項目)の選択肢より、該当すると思うものを選ぶよう回答を求めた。②喫煙に対する態度 i. The Kano Test for Social Nicotine Dependence version 2.0(以下 KTSND と略す)は喫煙に対する心理的依存を評価する尺度である。10 項目の設問からなり、「そう思う(3)」、「ややそう思う(2)」、「あまりそう思わない(1)」、「そう思わない(0)」の 4 段階リカート尺度で回答する。( )内数値に得点化され、高得点ほどタバコを美化、合理化し、害を否定してタバコを容認する意識が強いことを示す。総合得点は 0~30 点の範囲で、9 点以下が基準点である。 ii. 家族に禁煙・分煙を勧める必要性を感じるか否かを問い、感じる場合、想定した 7 項目の選択肢より、該当するものを選ぶよう回答を求めた。 iii. 家族への禁煙・分煙支援時に予測される困難として 7 項目の選択肢を示し、

該当するものを選ぶよう回答を求めた。③病児の家族への禁煙・分煙支援の実際 5項目の設問に対する支援の実施頻度を4段階「している(4)」「時々している(3)」「ほとんどしていない(2)」「経験がない(1)」で回答するよう求めた。そして( )内数値に得点化し、5項目の総計を求めた。《分析》統計解析ソフト SPSS Ver17.0 を用い、調査項目別に記述統計を行った。《倫理的配慮》調査に際しては所属大学倫理委員会にて承認を得た。

研究目的(2)に関しては、本調査の趣旨に賛同を得た研究協力病院もしくは診療所を探し、協力の意思が示された施設と協働して禁煙支援アクションプランを作り、評価した。

#### 4. 研究成果

調査(a)では、136部(回収率34.6%)の質問紙が回収された。対象は准看護師59名(43.4%)、看護師72名(52.9%)、無記入5名(3.7%)であった。対象の喫煙率は16.2%であった。受動喫煙の健康影響知識(正答率)では、肺がん、妊娠への影響は90%以上だったが、SIDS50.0%、乳幼児の肺炎35.3%、乳幼児の中耳炎14.7%と低かった。看護師の94.1%が「病児の家族に禁煙や分煙を勧める必要性を感じる」と認識するも、喫煙に対する心理的な依存傾向をみとめ、実際の禁煙分煙支援実施率は「喫煙状況の記録」の8.8%～「禁煙・分煙の奨励」の24.3%と低かった。

調査(b)では、2705部の質問紙が回収された。対象は准看護師197名(7.3%)、看護師2481名(91.7%)、無記入27名(1%)であった。対象の喫煙率は14.5%で、受動喫煙の健康影響知識(正答率)では、調査(a)と同様の傾向を示した。看護師の77.9%が「病児の家族に禁煙や分煙を勧める必要性を感じる」と認識し、調査(a)に比べて低い割合であった。そ

して喫煙に対して心理的な依存傾向をみとめ、実際の禁煙分煙支援実施率は「禁煙情報を提供している」の5.3%～「喫煙状況を尋ねている」の27.0%と調査(a)同様に低かった。

(2) A病院 B小児病棟から協力の意思が示された。そして研究協力者C(B小児病棟看護師)とアクションプランを作った。A病院は敷地内禁煙が施されており、B小児病棟は全室個室で小児がん患者が多数を占めた。Cと調査結果を踏まえ作成した具体的内容は、①看護スタッフ間での学習会開催、親に②喫煙するか尋ねる、③喫煙状況の記録、④禁煙する意思があるか確認、⑤禁煙関連情報の紹介(禁煙外来等)、である。これをベースにB病棟での実行可能性を検討してもらった。①の学習会には6名(30%)のB病棟看護師が参加し、中間管理職の看護師からはすぐにでも実行できる反応が得られた。しかし、B病棟管理職の異動など組織的基盤に変化があり、参加者の中には「何をしたらいいかわからない」「小児がん発病で罪悪感のある親にタバコを話題にしにくい」と実行への心理的抵抗もあった。アクションプランが実行され効果的なガイドラインとして普及するには、管理職からの支持的な基盤のもと、組織理念とプランを結びつけた仕組みを整えること、そのことが行動に迷うスタッフ看護師の心理的な抵抗を和らげる一助になると考えられた。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計4件)

1. Miki Konno, Tsuyoshi Asari, Michiko Ebina, Hisae Tabata, Encouragement Given by Nurses to Family Members of Sick Children to

Stop Smoking or Not to Smoke in Front of Children ; How Smoking Experience Makes a Difference, 14th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS), 2011. 2. 11., Seoul, Korea

2. 今野美紀、蝦名美智子、浅利剛史、小児看護実践者が病児の家族に行う禁煙・分煙支援の状況、第57回日本小児保健学会、2010年9月17日、新潟市
3. 今野美紀、秦恵子、蝦名美智子、伊織光恵、小児看護実践者が行う家族への禁煙・分煙支援の実際：実態調査の自由記述回答より、日本小児看護学会第20回学術集会、2010年6月26日、神戸市
4. 今野美紀、秦恵子、蝦名美智子、小児科診療所に勤務する看護師の禁煙・分煙支援の状況、第56回日本小児保健学会、2009年10月30日、大阪市

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

今野 美紀 (KONNO MIKI)  
札幌医科大学・保健医療学部・准教授  
研究者番号：00264531

### (2) 研究分担者

蝦名 美智子 (EBINA MICHIKO)  
札幌医科大学・保健医療学部・教授  
研究者番号：10168809

浅利 剛史 (ASARI TSUYOSHI)  
札幌医科大学・保健医療学部・助手  
研究者番号：40586484  
(H22)

秦 恵子 (HATA KEIKO)  
札幌医科大学・保健医療学部・助手  
研究者番号：70512226  
(H20, H21)

### (3) 研究協力者

上村浩太 (Uemura Kouta)  
札幌北榆病院・看護師

研究者番号：00264531